

タイトル：2019年度 研究セミナー（第20回）

日時：2019年12月21日（土）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階マルチメディアセミナー室(306)

「私の博士論文——なぜ書けたか？」

池田昭光

本報告では、2015年度に首都大学東京に提出した博士論文「流れと顔——レバノンにおける民族誌的研究」がどのような環境のもとで生み出されたかを中心に話題提供がなされた。最初に、博士論文で用いたフィールドワーク資料の収集過程が2004年末に始まったものであり、論文執筆は、試行錯誤の時期を含む大変長いものであったことが指摘された。次いで、関連年表が紹介され、旧制東京都立大学における博士論文提出のプロセスが確認された。

報告の中心部分では、2015年の夏季休暇と秋における草稿作成の様子が紹介され、非常勤講師をかけもちしながらの執筆の困難と、それでも短期間での集中した作業により初稿が完成された点が強調された。次いで、時系列的プロセスとは別の角度から、なぜ報告者の博士論文執筆が可能となったかについて、報告者自身の観点から、三つの点で分析的な指摘がなされた。

それらは、(1) 日本学術振興会特別研究員としてAA研在籍中、同じく博士論文の執筆過程にあった同世代の研究者と勉強会をもつことができ、未熟なデータや分析・考察を気兼ねなく検討し合う場を持つことができたこと、(2) 報告者が書こうとする方向性に近い先行研究を調査過程で「発見」し、またそれらの研究の著者自身が主宰する共同研究会で研鑽を積む機会が得られたこと、(3) 草稿の執筆に本格的に着手する前に、フィールドワーク資料の核心部分を用いた短いエッセイを書く機会があり、その執筆過程で資料や分析に見合った文章を形成することができたこと、とまとめられる。

報告の最後ではまた、いくつかの補足が述べられた。最終章の解釈と分析が最後まで不十分であった点、結局のところ博士論文の完成では自身の研究に満足がいかず、加筆訂正を経たうえでの単著の完成をもって初めて手応えを感じることができた点、博士論文の執筆作業は平素とは異なるストレスを伴いがちであるため、執筆者はメンタルヘルスの知識を得ることが推奨される点などである。

以上の報告に続き、質疑応答の時間が設けられた。勉強会の組織としての性格をめぐる疑問に対しては、多人数で開かれたものではなく、逆に、ごく少数のメンバーに限定する代わりに鋭角的な議論を目指したことが明らかにされた。また、執筆における「書きたいこと／書けること」の齟齬については、書きたいことに資料がそぐわない場合は資料に即した言語が見つかるように発想の方向性を変えるべきではないかという論点が提示された。

これらを通じて、分野や世代を異にする博士論文執筆者に対して、参考情報の提示および意見交換を行うことができた。